

# 事態認知による時間語彙・空間語彙分類の再考

寺崎知之

(京都大学・人間環境学研究所)

## 1. 本論の趣旨

空間表現からのメタファー的拡張が多いとされる時間表現に関わる語の中で、その逆方向の拡張をする「空間的分布を表す時間語彙」についても、いくつかの報告がある(定延 2000, 2002)。これらの用法では、元来時間を表すと思われる語が、空間的な位置や分布、包含などの概念を表示するという点で興味深い。

- (1) a. あと5分したらドライブインがあるから、  
そこで休もう。  
b. 定延なんて名字の人、めったにいないと思  
うけど。

(定延 2000:148)

また、これらの語は(2)のように、ある種の用法制約があることも知られている。こうした語彙の拡張にはどういった時間認知の働きが関わっているのかは、言語学の分野において未だ理論的な検討が続いている(本多 2005、など)。

- (2) a. ?うちの近所にはテニスコートがときどき  
あります。  
b. {今/?数秒前に} レストランがあったよ。  
(定延 2000:190-192)

(2a)は空間的に点在することを示す「ときどき」の用例だが、この例では不自然になる。また、(2b)の場合、同じ時間を示す語を用いたとしても、「今」ならば自然なのに対して「数秒前」では不自然となる。これらの問題に対し、本稿では「時間語彙」と「空間語彙」という分類を再考し、それぞれの語が表す事態把握のあり方や認知的方策の観点から説明を試みる。

## 2. 空間と時間を含む両義的把握

本稿では、それぞれの語が表す「時間」成分と「空間」成分は不可分なものであるとみなし、いわゆる「時間語彙」、「空間語彙」といった分類については、その語の用いられる状況、背景における具体的適用法に対応すると考える。つまり、あらゆる語彙には、元来時間と空間の両方の事態把握を内包した「両義的意義」が存在すると考える。そのため、語彙に含まれる意味や制約についても、時間と空間に適用されるに際しては、片方の意義が捨象されたとしても、その性質は保持されることになる。例えば、(2a)は一般的に「時間語彙」とされる「ときどき」が空間に適用される際に与えられる制約の1つと言われているか(定延 2002)、この制約は時間用法においても同様に見られる。

- (3) ?あの時計台はときどき鐘を鳴らす。

(3)は、毎時0分丁度に必ず鐘を鳴らすということを知っていた場合、不自然な文となる。これは「ときどき」という語彙に含まれる「事態の偶発性、意外性」が空間と時間の区別を問わずに与えられるためであると考えられる。(3)の場合、具体的に鐘の鳴る時間を知っているなら「ときどき」は不自然であるし、(2a)でも、「うちの近所」の場合、鐘の鳴る時間と同様にテニスコートの位置は熟知しているはずなので、その分布に「偶発性」は生じない。そのため(2a)は不自然な文となる。

こうした語では、むしろ文脈となる事態の性質が用法の容認度に大きな影響を与える。例えば、似たような例でも以下のような文は容認度が上がる。

- (4) 通学に使っている電車の線路沿いには、テニスコートがときどきある。

(4)の場合、(2a)と同様、「通学路」については熟知しており、偶発性はないように見受けられる。しかし、「うちの近所」との差は、そこに実際の「通学」というイベントが関わり、起点から目的地までの移動のイベントが想起される点にある。このため、実際の移動のイメージが強くなり、移動に伴っての「**時間の変化**」と「**空間の変化**」(移動)の**共起性**が強く打ち出される。そして、この移動(通学)というイベントにおいて、テニスコートの位置を熟知している必要は無く、出現に法則性も無いため、偶発性が含意される。

こうした背景事態的語義は、これまで「空間語彙」として捉えられてきた語に関しても同様に存在し、語に関わる事態の性質を見なければ説明できない現象がある。

- (5) a. 「はい、今から講義を始めます」
- b.\* 「はい、このあたりから講義を始めます」
- c. 「このあたりで講義を終わります」

(5)のような時間用法の「あたり」は、空間の「あたり」からの拡張と言われる(舩山・深田 2003)が、(5b)のように事態の起点として用いることが出来ない。これは時間が不可逆的な性質を持ち、遡って過去の段階を選択できないためであると考えられる。つまり、「あたり」で指す対象である「講義の起点」を過去に求めることが出来ず、範囲を取り得ない。元来「あたり」で指示出来るはずの点を取り得ないことが確定的であるために、その使用に齟齬が生じるのである。対して(5c)では「講義」が過去から継続して続いていたため、「講義の終点」という対象を過去の段階でも取り得たことが背景的に示され、「あたり」が使用できると考えられる。このことは空間においても同様に見られる現象である。

- (6) a. テーブルの上に置いて下さい。
- b.? テーブルの上あたりに置いて下さい。
- (7) テーブルの上あたりを見て下さい。

(6)は、物を置くよう聞き手に求める発話であるが、(6a)は問題ないが、(6b)は不自然である。これは、テーブルの上の周辺には、通常、物が置ける物理的な面が存在せず、テーブルの天板を起点とした「あたり」で示す場所が存在しないためである。つまり、この場合「あたり」の取る範囲は、置くという**事態**とは整合性がないのである。空間の場合も時間の場合も、同じような**事態把握**を含んでいるということである。これに対して、(7)のように、見るという事態では問題は生じない。

### 3. 結論

空間用法、時間用法といった用法の差については、これまで意味拡張、もしくは具体的な事態を想定した観点から説明が附されてきたが、これらの間には用法の区分を超えた密接な関係性が存在している。これらは互いに独立して存在するのではなく、あくまでその基盤となった背景にある事態を根源とし、片方に特異的といわれる制約も、実際には背景にある事態の性質に依存するものである。それはつまり、表示する対象の性質だけにとどまらず、それを捉える主体の動き、また、知覚者の持つ知識や意識の方向付けなど、様々な要素が時間と空間の意味の生産に関わっているということである。

### 参考文献

- 定延利之. 2000. 『認知言語論』、大修館書店.
- 定延利之. 2002. 「時間から空間へ?—<空間的分布を表す時間語彙>を巡って」、生越直樹(編)『対照言語学(シリーズ言語科学4)』 183-215. 東京大学出版会.
- 本多啓. 2005. 『アフォーダンスの認知意味論 生態心理学からみた文法現象』、東京大学出版会.
- 舩山洋介・深田智. 2003. 「意味の拡張」「多義性」、松本暲(編)、『認知意味論』73-186.大修館書店.